

# 万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行  
浄土真宗本願寺派  
万行寺 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾461-1  
電話 0267-67-2460



## ■住職法話

良い居場所をいただく「房舎施」  
ぼうしやせ

## ■～結ぶ絆から、広がるご縁へ～ ごえん

## ■本願寺の本

「人生は価値ある一瞬」大谷光真

## ■お知らせ、編集後記

## Photo

佐久地域は古刹こきつが多いことでも知られて  
います。中でも立派な三重塔がある真  
しょうじ  
祥寺は有名です。移築されたものである  
ようですが、周辺では珍しい建物で古都  
に來たような雰囲気味わえます。

# 住職 法話

## 良い居場所をいただく 「房舎施」

万行寺の活動拠点を佐久市に移して、この十二月で八年になりました。まだ本堂も無く、住居の一室を仮本堂にしているような状態ですが、狭いながらも門信徒方々と語らう場として少しずつ軌道にのってきたような状況です。

しかし、長野市で三百年余にわたって門信徒はじめ地域の方々にも愛されていた場所を離れ、何も所縁の無い佐久市という地にお寺の拠点を構えるということは、並大抵なことではありませんでした。まずは、地域の方々にお寺のこと、そして家族のことを知っていた、入口に寺の看板はあつ

ても本堂などの寺の構えも無いので、不思議そうに覗いていかれる方ばかりでした。地域の事にも関わりながら、少しずつ知られてきたようです。また、最近では、子どもが生まれた事を機に、お付き合いも少しずつ広がってきました。

気がつけば八年経つてみて、お付き合いも増えて、やっと「住んでいるな」という実感が湧いてきたような気がします。それは、これまでの私は、「ここに来て良かったのだろうか？」とか「ここに居て良いのだろうか？」と不安に思うことが、正直、度々あつたからです。

ところで、仏教では、他に

与え施すことを「布施」の行といえます。「御布施」と書いて財物を施す「財施」が一般的ですが、他に、財物を持たずして施しができるという「無財の七施」が説かれています。七施というように、七つあるわけですが、その七番目に「房舎施」という

ものがあります。これはお釈迦さまがおられたインドにあつては、旅人が体を休める家が少なくないところから、自分の家をきれいにして休息を欲する人によるこんで場を提供することの大切さを説いたものでした。いつでも来客に良い場所を提供するように心がけ

ることです。

私は、この「房舎施」という布施の意味を味わうと、ここにきて良かったのか、ここに居て良いのかという不安だったことが心からの感謝に変わってきました。この地域で長年住んでこられた方々のことばかり考えてしまい、素性も分からない者が何をしに来たのかと思っているに違いないと勘違いしていました。そうではなく、地域や大勢の方々のおかげによって、「私はここに居て良い」という最高の居場所をいただいているのだと気付かされました。厳しいけれど素晴らしい居場所をいただきました。



「結ぶ絆から、  
広がる「縁へ」

# 「縁」

⑧わたしのいのちを支えているものです。

「食事のことばから」

私たちは食前に何も意識せず「いただきます」という言葉を発します。しかし、近ごろは「いただきます」「ごちそうさま」の一声さえ出なくなっている。嘆く声も聞かれません。

浄土真宗本願寺派は二〇〇九年十一月に新しい「食事のことば」を定めました。

「食前のことば」  
多くのいのちを、みなさまの

おかげにより、「ごちそう」をめぐられました。

深く「恩を喜び、ありがたくいただきます。」

「食後のことば」

尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝にうめえます。

おかげで、「ごちそうさま」です。

「ごちそうさま」の「ごち」は、多くの動植物のいのちをいただくなければ生きていけない私たちのあり方への「慚愧」の思いが込められています。また「みなさまのおかげ」という表現には、食事に携わる人々の「ご苦労に対する」感謝の思いが込められています。

「食前のことば」は、食事が空腹を満たすだけではなく、食事というめぐみを通して、

私たちのいのちを支えているものへの「縁」を知らせていただく機縁となるでしょう。

「ごちそう」は、多くのいのちによってめぐまれた私の人生です。ですから、「報謝」させていただく決意が生まれます。それが「食後のことば」です。

もちろん、食事だけではありません。普段、私たちは何気なく生活していますが、その一つひとつを「縁」というまなざしから見れば、そこに多くの「おかげ」「ご恩」があり、私のいのちを支えられていることが見えてきます。

「縁」を見る習慣が身につくと、何も思わずにご飯を食べることができなくなるかもしれませんね。



「編集・発行／浄土真宗本願寺派総合研究所、重点プロジェクト推進室」より

## ～本願寺の本～

## 「人生は価値ある一瞬」

著者:大谷光真 発行:PHP研究所 1,080円(税込)  
 本書の「まえがき」のなかで、前門さまは「『人生を空しく終わってはならない、終わらせてはならない』ということが私の願いです。(中略)今さえ良ければ、自分さえ良ければという狭い思いを打ち砕く大切なはたらきを持った仏教を手がかりに、現代社会のさまざまな課題に、どう対処することができるかを考えてみました」と述べておられます。



専門的な用語は極力控え、生死の問題をはじめ、今回は特に若い人たちが抱えがちな問題(結婚、育児、職場の悩み等)や最近の社会背景にも関心を寄せながら、ご執筆いただいております。これまで仏教や浄土真宗にご縁の薄かった方にも是非お読みいただきたい一冊です。

(本願寺出版社ホームページより)

## お知らせ

10月25日(日)に、万行寺報<sup>ほうおんこう</sup>恩講法要をお勤め致しました。毎年10月の最終日曜日ということに定めて、恒例の法要として定着してきました。今年は、7名の門信徒と共に、法要と茶話会で和気あいあいと過ごさせていただきました。来年は10月30日になります。直ぐに予定に入れておいていただければ有り難いです。 合掌

## 編集後記

最近、自身でご法話をする機会があっても、聴聞<sup>ちやうもん</sup>させていただく機会を逃してしまっています。〃すすめて聴聞<sup>ちやうもん</sup>を!〃とお話しをしておきながら、面目<sup>めんぼく</sup>ありません。ですから、最近のご法話の内容にも深みが感じられなくなってきました。◆先日、他寺院の報恩講法要<sup>ほうおんこう</sup>のご縁で、勧学<sup>かんがく</sup>の浅田正博先生のご法話にお遇<sup>あ</sup>いすることが出来ました。久々に聴聞<sup>ちやうもん</sup>という場をいただけたことだけでも、リフレッシュ出来たようです。◆聴聞<sup>ちやうもん</sup>の積み重ねが、自身のご法話にも深みが出てくるのです。う。あらためて気付かされます。